

前回に引き続き、今号でもエーブルネット社の教育コンサルタント、Mary Sagstetter氏が米国のカンファレンス (CSUN: California State University, Northridge)にて発表したセッションの内容を翻訳し、お届けします。

**アシスティブテクノロジー**には多岐に渡る創造的な解決方法があり、障害のある人々が社会や生活の場で自立し、積極的に参加したり、より有意義に生きていくことを可能にする。アシスティブテクノロジーの有効性については、1988年に連邦議会にてTechnology-Related Assistance for Individuals with Disabilities Act (公法100-407)が可決した際に初めて認知された。この法は1994年に修正されている(Tech Actとして知られている)。連邦議会は、「Tech Actにおけるアシスティブテクノロジーの定義を個別教育プログラム (IEP: Individual Education Plan) に盛り込むことにより、テクノロジーを通して障害児の社会参加が可能になる」と法の意図を繰り返し述べた。

現在、障害のある多くの人々はテクノロジーを活用することで様々な壁を乗り越えている。アシスティブテクノロジーが仕事を行うための不可欠なツールとなっている場合もある。アシスティブテクノロジーの機器やサービスが利用できることは障害のある人々にとって以下のことが実現可能である：

- 自分自身の生活をコントロールできる範囲を拡大する
- 家庭、学校、職場、地域において、様々な活動に積極的に参加・貢献する
- 健常者との活発な交流
- 健常者では当然とされている様々な機会を持つことによって利益を得る (Hosmer, 1995)

1995年にBlenkとFineが彼らの書籍、Making School Inclusion Work にて指摘しているが、コミュニケーションは教育において何よりも重要な要素である。コミュニケーションの手段を持たない子どもにとって、周囲の世界は非常に困難な場所である。彼らは自らの生理的なニーズを伝えることができない。「水を飲みたい」と伝えるといった簡単なことも、コミュニケーション手段がなければ実現できない。こういった子ども達のコミュニケーションを支援する方法を探索することは大変重要である。しかしながら同時に時間と費用がかかるものである。コミュニケーションはその人間の本質へ繋がる扉であり、アシスティブテクノロジーは重度障害のある人々にとって世界を開く鍵の1つである (Blenk, Fine 1995)。SheetsとWirkusは1997年にこう述べている。

「拡大コミュニケーション機器やそれらの機器活用は、学校という場では、発語の限られている子どもへの移動機器の提供だけではなく、教室の中で他の子どもと共に活動に参加したり、コミュニケーションを広げることも指している (Sheets, Wirkus 1997, p.8)。SheetsとWirkusは使用者に優しい環境を創り出すことは、使用者自身に以下の効果をもたらすと考えを述べている：

- 自発性の増加
- 自立の増進
- 周囲との統合と、周囲から必要とされての参加 (Integrated and required participation)
- 責任 (Accountability) (能動的な役割を持つことによって)
- 学習と生活経験の拡大
- 周囲との関わり合いやコミュニケーションの機会の創出
- 子どもが持つ可能性に対する、周囲の見方の変化 (Sheets, Wirkus 1997)

アシスティブテクノロジーは、重度障害のある子ども達がいずれも活動に参加できる教育環境を創り出す鍵である。この支援のためのテクノロジーはインクルーシブ教育 (総合教育)



に大変有効なツールと考えられている。この概念はRocklage, Gillett, Peschong, Delhoreyによって支持され、彼らは次のように述べている (1995)。「アシスティブテクノロジー分野におけるテクノロジーは非常に重要である。日常生活や様々な活動の中で、個人のサポートや本人の積極的な活動への参加を促進することができる」(1995, P3)。第一の目的は、社会や教育の場において、障害のある子ども達がニーズを実現し、最大限活動に参加ができるように、アシスティブテクノロジーの利便性を子ども達の手が届くようにすることである (Wilds, 1989 p.6)。

しかしながら、この分野においてのプロフェッショナルはトレーニングが必要である。Fischer, Pumpian, Saxが1995年に次のように指摘している。「多くの教育者は障害児と健常児のインクルーシブ教育の現場において、必要とされる支援機器・サービスの類を使用しているが、その多くはアシスティブテクノロジーの効果的な活用に関する知識が不十分である」。加えて、多くの教育者がアシスティブテクノロジーの活用の経験が限られていることも報告している。また、生徒のためにアシスティブテクノロジーを確保しようとする場合、コンピューター、車いす、市場で購入できるコミュニケーション機器以外のテクノロジーの適用に関して考えられることは稀である (Fischer, Pumpian, Sax 1995)。

BlackhurstとMorseは1996年、「発達障害のある障害者に関わる教育者や周囲の人々にアシスティブテクノロジーの知識が欠如していることが、アシスティブテクノロジーの活用の主要な壁となっている、ということが連邦議会による調査によって判明した」と指摘しているように、トレーニングの欠如があることを認めている(Blackhurst, Morse 1996 p.131)。

テクノロジーとインクルーシブ教育はどちらが欠けても実現は困難である。テクノロジーのサポートと適合がなければ、多くの重度障害のある生徒達は教育を最大限に活用することはできない。また、インクルーシブ教育の現場における周囲との交流の機会がなければ、生徒達は能力を真に発揮することはできないのである(Rocklage, Gillett, Peschong, Delohery 1995)。

アシスティブテクノロジー機器は自立への長い道のりの第一歩にすぎず、それらを手にすることが目的ではない(Fleisch, 1989, p.6)。中学部、高等部へと進む生徒達は、いくつかのツールと考えを合わせることで、学校、家庭、職場、地域環境での活動への参加を増やすことができる(Wise, 1997)。LevinとScherfenberg(1990)はこう述べている。「テクノロジーは重度障害のあるすべての人々によって我々の世代が提供できる贈り物である」。テクノロジーは障害によって発生した壁に橋をかけ、新たな経験や活動、新たな環境へのアクセスを広げる。



アシスティブテクノロジー機器は、障害のある人々の多くにとって、健常者が楽しんでいる日常生活の中での活動に積極的に参加する機会を多く提供してくれるものである。アシスティブテクノロジーは積極的な参加のチャンスを与える。他の参加者が手先を使って物を取り扱うのと同じように、重度障害のある人々はアシスティブテクノロジー機器を使用することで、電源をコントロールし、他の活動に参加ができるようになる場合がある(Levin, Scherfenberg 1990)。声を出しコミュニケーション機器を使用することは、重度障害のある人々に多くの利点を提供している。声を出すことはコミュニケーションの自然な形であり、親しい人も面識のない人でも簡単に理解することができる。そのため、重度障害のある人々は様々な環境において有意義な参加や交流の機会が増えるのである(Levin, Locke 1999)。ファーストフード店で注文したり、ゲームで遊んだり、母親に「ありがとう」と言ったり、というのは、コミュニケーションのメッセージのいくつかの例である。こういったコミュニケーションのメッセージは、障害のない人々が楽しむ経験と同じ経験に自発的に参加していることを、表すことになるのである。

アシスティブテクノロジーが障害のある人々にとって持つ利点は膨大である。学校の普通学級のみならず、生活全般でのインクルーシブは今は現実となり、かけ離れた夢ではなくなった。

人生は自分と周囲の世界とのコミュニケーションそのものである。自らが参画している環境はどの個人にとっても様々な関わり合いを促進する。アシスティブテクノロジーを使うことで生徒達はお互いに話しかけ、冗談を言ったり、名前を書いたり…等、多くのことが実現する。重度障害のある人々にとって、アシスティブテクノロジー機器の活用は、様々な活動の経験の機会を増大させることができる。繰り返しとなるが、「インクルーシブ教育とアシスティブテクノロジーは同一の歩幅で進めて実現する」とRocklage, Gillett, Peschong, Deloheryは述べている(1995)。この2つの要素が組み合わさることで、重度障害のある人々が地域社会の確固たる一員となり、個人の人生における最大限の可能性を引き出すことに繋がるのである。

## 参考文献:

- Blackhurst, E., and Morse, T. (1996). Using Anchored Instruction to Teach About Assistive Technology. Focus on Autism and Other Developmental Disabilities, Volume 11, (3), 131.
- Blenk, K., and Fine, D. (1995). Making School Inclusion Work. Massachusetts: Brookline Books.
- Fischer, D., Pumpian, I., and Sax, Caren. (1995). Assistive Technology and Inclusion. [On Line]. Available: <http://www.asri.edu/CFSP/brochure.asstech:htm>.
- Fleisch, Julie. (1989). Assistive Technology: A Parent's Perspective. Nichy News Digest, Number 13, 1-11.
- Hosmer, Janet. (1995). Directions: Technology in Special Education [On Line]. Available: [www.dreams.org/feb95.htm](http://www.dreams.org/feb95.htm).
- Levin, J., and Scherfenberg, L. (1990). Breaking Barriers. (Revised Edition) Minneapolis: AbleNet.
- Levin, J. and Locke, P. (1999). Making Connections: A Practical Guide for Bringing the World of Voice Output Communication to Students with Severe Disabilities. Minneapolis: AbleNet
- Rocklage, L., Gillett, A., Peschong, L., and Delohery, B. (1995). Good Junk + Technology + Creativity = Positive Inclusion Experiences. Paper presented at Closing the Gap Conference. Minneapolis, MN.
- Sheets, Lana and Wirkus, Mary. (1997). Everyone's Classroom: An environment designed to invite and facilitate active participation. Closing the Gap, Volume 16-Number 1, 1-9.
- Wilds, M. (1989). Effective Use of Technology with Young Children. Nichy News Digest, Number 13, 6-7.
- Wise, M. (1997). "Participating in High School and Beyond: AT Strategies for Learners with Significant Disabilities." Paper presented at Charting the C's, Brainerd, MN.



Mary Sagstetter  
(エーブルネット社教育コンサルタント)

特殊教育の教諭として、重度障害を持つ児童に11年間関わる。その中で、自己充足や授業における参加において支援技術を活用。地域や州、国レベルの学会において重度障害者に関連する支援技術について論文発表を行う。現在はアメリカ、ミネソタ州にあるエーブルネット社にて教育コンサルタントとして活躍。